

まえがき

一九七五年四月、横浜国立大学教授から神奈川県知事に初当選した長洲一二さんに請われ、四十四歳で県庁に入った私は、四期十六年間政策スタッフ（アメリカ風に言えば特別補佐官、八七年から九一年までは副知事）を務めた。九一年六月には、知事の命により長洲県政の最重要プロジェクトの一つである「かながわサイエンスパーク（略称KSP）」を軌道に乗せるため、県を退職し、運営会社として設立された第三セクターの（株）ケイエスピー（資本金四五億、うち十五億が県、川崎、開銀、民間企業が三〇億）の社長に就任した。

県庁退職にあたり、送別会を開いたり、日本初のサイエンスパーク立ち上げに向かう私を励ます壮行会を催してくれたりした先輩、同僚、友人、知人たちに、記念品としてお配りするため、青春時代の詩歌日記をまとめて私家版を作ったのが詩歌集「はるかなる青春（はる）」である。

そして、この度、卒寿を迎えるに当たって、四〇代後半から中高年時代の詩歌日記を整理したものを「朱夏から白秋へ」「白秋から玄冬へ」と題してその続編とし、一冊に収録した。したがって、「久保孝雄詩歌集・詩歌日記で綴る人生の四季」は、「Ⅰ・はるかなる青春（はる）」、「Ⅱ・朱夏から白秋へ」「Ⅲ・白秋から玄冬へ」の三部構成となった。これは文学作品というより、詩歌の形を借りて昭和初期から90年生きてきた人間の生活・活動の足跡を綴ったものである。

研究者から公務員へ、公務員から経営者へ、さらに社会活動団体役員へと駆け抜けてきた人生を振り返ると感慨ひとしおのものがある。「人のこの世にあるは、父母を因とし、無明（むみょう）を縁とす」という仏教語があるが、改めて父母に感謝し、奥深き無明の縁（えにし）に深く頭（こうべ）を垂れる。

二〇一九年六月七日 九〇歳の誕生日を記念して

久保孝雄